

マザー・テレサ (1910.8/26 ~ 1997.9/5)

(「イエスを訪ねて」より)

マザー・テレサについて

(本名 アグネス・ゴンジャ・ボヤジュー(ボワジュ))

- 1910年8月26日 マケドニアのスコピエ(旧ユーゴスラビア)で誕生。
両親はアルバニア人、熱心なカトリック教徒、第三子(姉、兄)
1922年(12歳) 修道女(シスター)になる決心
 - 1928年(18歳) アイルランドのロレット修道会に入会
この修道会からカルカッタに派遣
1929年(19歳) - 1948年(38歳)カルカッタにある聖マリア高校で(地理)と(歴史)を教えた。最後には校長もつとめた。
学校の教員(先生)から、地域の住民を支える活動へ
 - 1946年9月10日(36歳) (自動車)の中で「修道院を出て、貧しい人びとと共に住んで、その人びとを助けるように」との神の声を聞く。
 - 1948年(38歳)で3ヶ月間、看護学と薬学の集中教育を受けたのち、ひとりでスラムに入り、活動を開始。
1949年(39歳) 帰化して、インド国籍を得る(インド人)
 - 1950年(40歳) 「神の愛の宣教者会」という新しい修道会を創設
修道会の会則 清貧 貞潔 (従順)
「貧しい人びとの中でも、最も貧しい人びとに仕える」ことが目的
(例) 飢えている人に食料を与える。裸の人に衣服を与える。
 - 1952年 (1)「死を待つ人の家」...死にかけている人を受け入れる
(2)「子供たちの家」(シシューバヴァン)...捨て子を育てる
(3)「平和の村」...ハンセン病の施設
(4)「愛の贈り物」...長期療養所のためのセンター
(構内に病院、リハビリセンター、作業所を設ける)
 - 1979年(69歳) ある賞を受賞。その賞とは?(ノーベル平和賞)
(授賞式のエピソード)
授賞式のあとに晩餐会が行われることを知ったマザー・テレサは「勝手なお願いですが、その夕食会のために用意した費用を、カルカッタの人びとのために小切手としてわたしにくださいませんか」と語ったという。
関係者は相談の上、夕食会を中止して5,000ドルの小切手をマザーに渡した。マザーは「どうもありがとう。これで400人の貧しい人びとの一年間の食料をカルカッタで買うことができます」と言って大変喜んだ。
- 1981年4月、1982年4月 訪日、講演。
- 1997年9月5日 死亡(日本時間6日、午前1時)(87歳)
9月13日 国葬が行われた。

マザー・テレサの言葉

「(イエス)は、捨てられた人や、孤児、病人、死にかけている人の中にいらっしゃるのです。」

カルカッタの路上生活者 - 約 40 万人位いる。なぜ、瀕死の人をホーム（死を待つ人の家）に受け入れるのか？

マザー・テレサの答え

「まず何よりも、いない人ではない（必要な人）と感じ取ってもらいたいのです。この人たちを大事に思っている人がいるのだと知ってもらいたい。まだ生きていなければならぬ数時間のあいだに、人間からも、神からも大事に思われているのだと知ってもらいたい。」

「この世の最大の不幸は、貧しさや病ではない。むしろ、そのことによって見捨てられ、誰からも自分は必要とされていないと感じることである。」

「死を待つ人の家（ホーム）」で死んだ人 故人の宗教で葬儀が行われる。

マザー・テレサの言葉

「私たちはキリストのように（貧しく）なることを望みます。そのキリストは、貧しい人びとの間に生まれ、生き、働くことを選ばれました。」

Poor is beautiful. (貧しい人は素晴らしい)

マザーは、自分の生き方として、(貧しさ)を決心して選び取った。

「神の愛の宣教者会」のシスター

3枚の修道服（サリー）を持つことが許されている。

1枚は（着る）ため、1枚は（洗う）ため、1枚は（かわかす）ため

「神の愛の宣教者会」のかかげる「三徳」

(1) 神への全面的な（自己譲渡） (2) 愛をこめた（信頼） (3)（快活）

マザー・テレサの愛唱聖句

「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」（ガラヤ 2:20）（パウロの言葉）

- ・マザーたちは、自分たちの働きを福祉事業、慈善運動とは考えていない。
（失業や貧困や死はそのまま、乞食は乞食のまま、浮浪者は浮浪者のまま、何も変わらない。批判。しかし国籍や宗教を越えて何かが変わって行く？）
- ・イエスの模範に従って、神に自分たちのすべてをささげようと考えている。
（キリストにならいて）

Q118 マザー・テレサたちの働きの源泉は何か？（信仰生活にとって大切なもの）

A. 祈り

修道院を訪ねる人に、マザー・テレサは、彼女たちの働きの源泉は祈りであり、祈りによって神ご自身という贈り物を受け入れることができると言う。(P.47)

マザーたちの一日の生活は、「祈り」から始まり、「祈り」で終わる。

マザー・テレサたち（神の愛の宣教者会）の日課

4時30分	起床	5時（祈り）
5時45分	ミサ	
6時30分	朝食と洗濯	
7時30分	各施設に出発、奉仕活動	
12時30分	昼食	
13時10分	反省（黙想と祈り）	13時30分 休憩、自由時間、お茶
14時15分	霊的読書（または指導）	
14時45分	午後の奉仕	
18時45分	（祈り）	
19時30分	夕食	
20時10分	ミーティング	
20時30分	（夕べの祈り）	
21時	リクレーション（繕い物、歌など）	21時30分 就寝

その他

1997年9月8日世界キリスト教情報より

献身的な奉仕活動に生涯ささげ

=マザー・テレサ9月5日死去=

【CJC=東京】『カルカッタの聖女』と呼ばれたマザー・テレサが1997年9月5日心不全で死去した。八十七歳だった。インドのカルカッタを拠点に世界の貧しい人々やハンセン病患者の救済に生涯をささげた。1979年にはノーベル平和賞を受賞している。本名はアグネス・ゴンジャ・ボジャジュ。1910年、アルバニアのスコピエ(現マケドニア領、当時はオスマントルコ帝国領)で生まれた。28年9月、18歳でアイルランドのロレット修道会に入り、同年十二月インドに派遣され、29年5月シスター(修道女)となり、テレサと改名した。

1931年からカルカッタの同修道会付属女学校で歴史や地理などを教え、37年には学校長に就任したが、第二次大戦中にカルカッタを襲い多数の餓死者を出したききんに、深い精神的衝撃を受けたと言われる。46年9月、汽車の中で「貧しきものたちと共にあれ。貧しきもののために働け」という神の声を聞き、貧しい者への奉仕を決意。インド独立後の48年、教壇を去り、ローマ教皇庁の許可を得て、カルカッタのスラム街に移り住み、貧しい人々や孤児、ハンセン病患者らの救済活動を始めた。

1950年、自ら修道会『神の愛の宣教者会』(ミッシヨナリーズ・オブ・チャリティー)を設立、インド国籍を取得した。このころからマザー・テレサと呼ばれる。

同会は、行き倒れの人を収容し、衣料と食料を与える「死を待つ人の家」、孤児院「シシュ・バワン」、ハンセン病患者のための医療施設と次々に貧者・弱者救済の場を広げた。現在は世界二百以上の都市に施設を持ち、三千人以上の修道女、支持者が活動している。

マザー・テレサはこの数年、心肺機能の悪化など高齢による体力の衰えが目立ち、昨年1996年8月、マラリアの再発による発熱で入院した。九月には就寝中にベッドから転落

して骨折し入院、十一月には、心臓の苦痛を訴え入院した。今年に入ってから三月に『神の愛の宣教者会』の代表をインド人修道女のニルマラさんに譲ったが、その後も米国を訪問するなど奉仕活動を続け、ダ イアナ元英皇太子妃 が八月三十一日に事故死した時にも祈りをささげ、六日 カルカッタで開かれたダ イアナさんの感謝礼拝には出席することになっていた。

日本にも八一年以降、たびたび訪問、東京の山谷や大阪市のあいりん地区などに足を運んで「貧しい人のために行動を」と訴えた。マザー・テレサ日本事務所が設立され、東京に捨て子を育てる施設も開設されている。

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、避暑地であるローマ近郊のカステルガンドルフォでマザー・テレサの死去を知らされ、「大きな悲しみ」に襲われたと報じられた。教皇はこれまでにマザー・テレサとは数回会見したことがあり、別荘内の専用礼拝堂にこもって祈りをささげている。「私に特別な治療はいらない。私が仕えた貧者たちと同様に死なせてほしい。この国では、貧乏な人は私の受けている治療を受けられないのである以上、私が特別扱いされる理由はない」。心臓の苦痛を訴えて入院したマザー・テレサは死の床で、手術を進める医師団にこう語った、と毎日新聞は報じた。

.....決して自らの名声は求めず、恵まれない人々への「愛の奉仕」に一生をささげたマザー・テレサが五日、八十七年の生涯を閉じた。「豊かさとは与えること」。キリスト教の説く愛を、言葉よりも行動で示し続けたそのひたむきさは、国境や宗教を超え世界中に感銘を与えた。.....共同通信の速報だ。「世俗的な質問しか浴びせられず、何ともまずいインタビューだった。思い返すと赤面する」。マザー・テレサの活動を初めて世に知らせるきっかけとなった六八年の英BBC放送の番組を担当したマルカム・ムーガリッジ氏は回顧録の中でこう述べている。

マザー・テレサの対応があまりにもぎこちなく、放映見送りの意見が同放送幹部の間でも一時出たが、放映された番組は反対に視聴者の大きな反響を呼び、たちまち多額の寄付金が寄せられた、と言う。「恵まれない人々にとって必要なのは多くの場合、金や物ではない。世の中でだれかに必要とされているという意識なのです。見捨てられて死を待つだけの人々に対し、自分のことを気にかけてくれた人間もいたと実感させることこそが、愛を教えることなのです」「現代における高貴な人間愛の象徴」（授賞理由）と称賛された七九年のノーベル平和賞受賞後も、マザー・テレサは絶えずこの言葉を口にしていたと、ニューデリーから共同通信の木庭慎吾記者が報じている。

『マザーテレサのことば』より

もし貧しい人々が飢え死にするとしたら、それは神がその人たちを愛していないからではなく、あなたが、そしてわたしが、与えなかったからです。神の愛の手の道具となって、パンを、服を、その人たちに差し出さなかったからです。キリストが、飢えた人、寂しい人、家のない子、住まいを捜し求める人などのいたましい姿に身をやつして、もう一度こられたのに、わたしたちがキリストだと気づかなかったからなのです。

神は飢えている人、病める人、裸の人、家のない人のなかにおられます。飢えといってもパンがないためだけでなく、愛、思いやり、だれかの“あなた”でありたいことの飢えなのです。また裸といっても服がないだけのことではなく、見ず知らずという理由だけで、優しい心づかいを示してもらえない意味での裸であり、家がないというのは、石で造った家だけでなく、自分を招き、受け入れてくれる人を持たないゆえの家なしなのです。

「最も大切なことは、恵まれない人々の面倒をみることではなくて、その人々を愛することです。」(マザーテレサ)

マザーテレサの活動の一つに「ハンセン病患者の家」があります。ハンセン病を患って誰からも助けられず、嫌われて路上でたたずむ患者たちを収容する施設です。「ハンセン病患者の家」で働くシスターたちに向かって、マザーテレサはこう言います。「患者の手に触れなさい。愛を持ってふれるのです。患者たちの手にあるのは病の中にある神様そのものなのです…」。親と別れたり捨てられた孤児たちがいます（「孤児たちの家」）。親と別れた心に寂しさを持っている孤児たちに向かって、マザーテレサは「あなたも望まれてこの世に生まれてきたのですよ…」と心やさしく語りかけるのです。（中学校の教師）

彼女のさまざまなエピソードは、彼女が本物であったことを証しています。実に、死んだ後彼女が残したものは、2枚の質素な木綿のサリーと着古したカーディガン、そして常に持ち歩いた布袋だけでした。本当に清貧そのものでした。また、権威にもおもねるようなことは全くありませんでした。教皇から送られた豪華な自動車は、貧しい人々のために資金を集めるための賞品として提出してしまいました。ノーベル平和賞を受けたお祝いの晩餐会も断わり、その費用は貧しい人々のために使うことを求めました。ダイアナ妃から寄贈された衣服は、競売にかけております。

ひたすら貧しい人々を救うことに徹した彼女の生涯を「貧者救済の生涯」「貧困者のための生涯」と賛えることは、的確な表現かもしれませんが、ただそれだけだったのでしょ
うか。彼女によって、希望を与えられ、救いへの道を与えられたのは、貧しい人々だけで
なかったのではないのでしょうか。現代世界そのものが、そして私たちが、彼女によって、
光を与えられ、進むべき道を教えられたのではないのでしょうか。

昨年(1996年)の暮、マザーが重態というニュースが流れました。そのニュースを知った小6の女の子から「マザーに渡してください」という手紙をいただきました。マザーテレサのことを国語の教科書で知ったそうです。とても、心に残るマザーテレサへのお手紙ですので、許可をいただいてご紹介いたします。

マザーテレサ様、

はじめまして。

私は日本の学校に通う、小学校6年生の女の子です。あなたのことを、最近勉強しました。その勉強したなかで、私はあなたにすばらしいことを教えてもらえました。あなたは「本当に不幸なのは、病気や空腹で死ぬことではない、貧しいことによって社会から見捨てられた孤独が、本当の不幸なのです。」そういったあなたの考えにあっとうされ、あなたにはどうして、こんな大きな力があるのだろう。どうして、みんなのために、自分の一生を神にささげたのだろう。そう思いました。私は、そんなこと考えもせず、今私が毎日やっていることがすべて、あたりまえなんだと思っていました。でも、あなたがいる街は、たくさん貧しい人々が、現在もたくさん愛を待っている。私は愛っていうとどういう意味か、一言では言いあらわせません。でも、あなたと出会って、愛は、一言ではいえないけど、「愛をあたえます」と言うだけでは、愛ではないのだということがわかりました。愛

は、言葉だけではなく、体全部で、伝えるということ。

私は、今、あなたの状態があまりよくないと、先生から聞きました。私はそのことを聞いたとき、死なないで、そう思いました。なみだが出そうになりました。私は、あなたから愛をもらいました。今度は、私があるあなたに愛をあげる番です。……でも、私にはあなたに、私は何をすればいいのか……。私はあなたに……。あなたに、私からのせいっぱいの愛のしるしとして、こまっている人がいたら、その人に愛をあたえたいと思います、こんなことしかできなくてごめんなさい。

私はあなたが幸せでいてほしいと思います、輝いてほしいと思います。

がんばって。これからも世界の人々に愛を与えてください。あなたは、神様です。だから、どうか、死なないで。死なないで。

私はあなたの愛をもらえて、うれしいです。今度は、あなたが私の小さな愛を、受け取ってくれると、とてもうれしく思います。

本当にありがとう。

チサ

日本のカトリック教会としてのコメント

カトリック中央協議会

事務局長 森 一弘 司教

マザーテレサの帰天

彼女は、現代世界を照らす偉大な光でした。

社会から見捨てられ、片隅に追いやられる貧しい人々の人生を大切に扱いました。貧富の差、民族、宗派、階級、身分の違いを越えて、一人ひとりの人間の尊厳を見つめ、実践的に訴え続けました。

彼女を活かしてきた理念は、カトリック教会からくるものですが、インドでの彼女の働き、植民地時代からのカトリック教会の宣教のあり方も変えてしまいました。

富にも権力にも無縁な彼女の生涯が、多くの人々を引き寄せたのは、偽りのない真実な愛の力だったと思います。彼女の生涯は、現実の世界の中で、人々が心底、警戒を解いて信じられるものは、偽りのない愛であること、それしかないことを、明らかにしてくれたと思います。

彼女が示した光が、二十一世紀に向かう私たちの歩みを照らしてくれることと信じて

マザー・テレサを偲んで

カトリック東京大司教 白柳誠一枢機卿

このたび、マザー・テレサの訃報に接し、大きな悲しみを覚えています。神の計らいとはいえ、人間的に考えるならば、誠に惜しい方を失いました。

昨年8月、マザーが突然入院された時、全世界の新聞、ラジオ・テレビが日ごとに病状の進展を報じ、宗教の差異を超えて病院の前でマザーの回復のために祈りが捧げられたとのことでした。政治家でもなく、学者でもなく、実業家でもない一人の小柄な老婆に、どうして世界的な関心が寄せられるのでしょうか。それは多分、マザーの生き方、マザーのしていることが現代世界で必要とされているからでしょう。自分もそれにあやかりたいと思っても、なかなかできない、そのことをマザーはなさっている。その人への敬意、その行為への憧れからではないでしょうか。

アルバニア出身の老修女が国、民族、宗教を超えて、貧しい人、弱い人の中でも最も貧

しい人、最も弱い人に対する徹底的な奉仕、声を出せない胎児から死の病に横たわる老人に至るまで、生涯、人間として大切にされたことのない人から、エイズ、重い皮膚病にかかった人、省みられない子供たち、難民に至るまでのすべての人の生きる権利を擁護しそのために命を賭けて惜しみなく、徹底的に生きるマザーのその姿は、尊敬をこめた共感を呼び起こします。

だれでも人を殺すことは悪であることを知っています。かつて胎児を殺すことは法律で禁止されていました。安楽死（尊厳死ではなく）も禁止されていました。それが現代では法律によって認められるように変わりつつあります。民主主義の一つの大きな柱は、人が、人の生きる権利が尊重されることですが、現代は声を出せない弱い人たちが生きる権利を奪われる「死の文化」が堂々と叫ばれています。マザーの人間観は、人間はだれであっても神からつくられたものであり、そのなかでも最も弱い人たちを大切にすることにあります。したがって、だれから非難されようと、その信念を恐れなく述べ伝え、みずからそれを実践しているのです。

私はかねてからマザーとそれに共鳴する修道女たちに強い関心と深い敬意を払っていましたが、1981年にマザーの精神に生きる3人の修道女を招くことができました。以来日本の3か所で、約15人の修道士たちが奉仕活動をしています。初めて日本を訪れたマザー・テレサの言葉を今でも鮮明に覚えています。

「日本に来てその繁栄ぶりに驚きました。日本人は物質的に本当に豊かな国です。しかし、町を歩いて気がついたのは、日本の多くの人には弱い人、貧しい人に無関心です。物質的に貧しい人は他の貧しい人を助けます。精神的には大変豊かな人たちです。物質的に豊かな多くの人には他人に無関心です。精神的に貧しい人たちは。愛の反対は憎しみとおもうかもしれませんが、実は無関心なのです。憎む対象にすらならない無関心なのです。」

マザー・テレサの生き方は今では世界の多くの人に知られており、彼女の主な奉仕の場であるカルカットには、世界中からたくさんの見学者、ボランティアが訪れています。その人たちの多くは「マザー、私たちは何をしたらよいのでしょうか」と質問するそうです。多少「少し手伝ってください」という答えを期待しての質問かもしれませんが、マザーは決まったように、次のように答えるそうです。「皆さんはすぐにお国にお帰りなさい。そして皆さんの最も近いところから愛の行為、人を大切にすることを始めてください。愛は最も近いところから始まるのです」と。

「私たちの最も近いところといえば、それは日常生活の場である家庭であり、職場であり、学校です。そこで本当の意味で大切にされていない人がいるかもしれません。家庭でご主人は自分の本当のことを奥さんから理解されないで苦しんでいるかもしれません。反対に奥さんは、ご主人から自分の望みを分かってもらえないで悲しんでいるかもしれません。子供たちも、ご両親から若者の心が理解されないでふさぎ込んでいるかれ知れません。ご両親は、こんなにも子供たちを愛しているのに分かってもらえないと嘆いているかも知れません。お年寄りも若い人から、若い人はお年寄りから理解されないで、互いに孤独でいるかも知れません。病人は健康な人から、健康な人は病人から、互いの心が分からずに苦しんでいるかも知れません。職場で同僚の一人が目上の人から誤解され、同僚からも理解されずに苦しんでいるかも知れません。学校で語り合う友だちがなくて、校庭の片隅にたたずんでいる者がいるかも知れません。私たちの最も近いところに大切にされることを待っている人がいるかも知れません。愛はそのようなところから始まるのです。」

また、こんな話も聞いたことがあります。「私たちはたまに会う人に微笑みかけるのは易

しいのです。でも毎日会っている人に微笑むのは難しいです。私もそうです。」

確かに私たちはたまに会う親戚、友人に笑顔で挨拶できます。そしてそれは難しくありません。しかし、毎日会っている家族の人にいつも笑顔で接することは、努力のいることです。でも、微笑みには人間関係を温かくする不思議な力があります。マザー・テレサはそれを言っているのです。

言葉だけが入り乱れている今日、実践によって裏づけられた言葉には責実味があり、力があります。なんだか現代人に対する警鐘のような気がいたします。マザー・テレサに心から感謝をささげ、そのごめい福をお祈りいたします。

マザー・テレサ追悼ミサについて

東京

9月8日(月)午後4時～5時
カトリック東京カテドラル聖マリア大聖堂
112 東京都文京区関口3-16-15
TEL 03-3941-0929
主催・カトリック東京大司教区
主司式・森一弘司教

大阪

9月13日(土)
カトリック大阪カテドラル・玉造教会
540 大阪府中央区玉造2-24-22
TEL 06-941-2332
主催・カトリック大阪大司教区
主司式・松浦悟郎神父(司教総代理)

名古屋

9月7日(日)午後7時～8時
カトリック名古屋カテドラル・布池教会
461 名古屋市東区葵1-12-23
TEL 052-935-6305
主催・神の愛の宣教者会(マザー・テレサが創立した会)
主司式・野村純一司教

大分

9月8日(月)午前11時～12時
カトリック別府教会
874 別府市末広町1-14
TEL 0977-22-1772
主催・カトリック大分司教区
主司式・平山高明司教

京都

9月15日(月)午後6時30分～7時30分
カトリック河原町教会
604 中京区河原町通三条上ル
TEL 075-231-4785

主催・カトリック京都司教区
主司式・大塚喜直司教

1979年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサは、今世紀で最も世界から尊敬を集めた女性と言える。

1910年にユーゴスラビア（今のマケドニア）で、建築会社の共同経営者の父の下に生まれ、不自由ない暮らしをしていたが、28年に尼僧になることに決めて、アイルランドのダブリンに渡った。修行の後、インドのダージリンに行き、31年、16世紀のスペイン人尼僧の名前をとってテレサと名乗るようになった。29年からは、カルカッタの高校で地理を教えていたが、街にあふれる貧しい人々の姿を見て、教師の仕事をあきらめ、48年にインド市民権を取り、その後に「神の愛の宣教者会」を創立した。52年からは、「死を待つ人の家」を始めた。カルカッタの街角で弱っている人を連れてきて、亡くなるまでの間の世話をするものだ。また、ハンセン病の患者、目が不自由な人、障害者など弱者を救済する活動を進めていた。ここ数年は、高齢のため病気がちで、昨年末にはカルカッタの病院で心臓手術を受けた。

マザー・テレサは貧困者のために、受賞したすべての賞金を、彼女が主催する救済事業の基金とした。1990年までに3000人を超す修道女が神の愛の宣教者会に所属し、施設がある国は25カ国にのぼる。同会でマザー・テレサの後を継ぐのはニルマラー修道女（62）となっている。